

2014年度 第11回ジェンダー史学会年次大会 要旨一覧

部会 A

◆水戸部由枝（明治大学）

性規範の多様化に揺らぐ西ドイツ社会——『性の図解書』論争にみる公権力側の焦り

ドイツの社会国家性の歴史的展開過程を追究してきた川越修は、1960年代後半から70年代にかけて、社会の個人化の加速と家族モデルの動揺により大きな変化が訪れたと指摘する。戦後ドイツ社会国家は、核家族、性別役割分業の推奨、男性単独稼得者モデルなどの特徴をもつ近代家族（標準家族）の再建を理念としていたが、60年代に入ると政府は、法律・伝統的な性道徳・イデオロギーを通じては、結婚・子育てからの逸脱、非標準的家族の広がり（家族の多様化）、若者たちの性の解放といった動きを堰き止められなくなった。では、結婚・子育て・家族・性道徳に関する見解はいつ頃からどのように変容したのだろうか。それに対して政府はどのような対応に迫られたのか。

本報告では第一に、ドイツ連邦統計局発行の『統計年報（1952-90年）』とアレンスバッハ研究所による世論調査報告書（1947-83）をもとに、ライフコースと男女平等意識の変容を明らかにする。第二に、家族計画（産児制限）に関するアレンスバッハの世論調査の結果と性科学者ハンス・ギーゼによる「大学生の性行動」調査結果（1968年）から、若者たちの性の解放の実態を浮かび上がらせる。そして第三に、個人の権利を保障すると共に法や制度を通じて私的領域を管理しようとした公権力側の若者たちの新しい性道徳観への対応について、1969年に保健省が発行した性教育本『性の図解書（*Sexualkunde-Atlas*）』を巡る議論から考察する。ドイツ社会民主党連邦議員で当時の保健相ケーテ・ストローベルは、青少年にある程度の選択の自由を許容する一方、彼らの性行動に対する責任意識を高めるため、また、学校での性教育の必要性を認識しはじめた文部省、教員、保護者の要望に応えるため、学校教材として『性の図解書』を市販した。しかしその内容への批判が、ドイツキリスト教民主同盟の管轄下にあった家族省、キリスト教系組織、家族連盟、性教育相談所などから多く寄せられ、国家として共通の性教育方針を見いだすのは困難な状況にあった。

本報告では、1960年代前半からのライフコースの変容の根底に、男性観・女性観、結婚観・離婚観、子どもの見方の変化があること、60年代半ば以降若者たちの間で性規範の多様化が顕著になったこと、こうした実情をふまえて政府側でも性別役割分業に基づくライフコースや伝統的な性道徳に捉われないオルタナティブな性道徳や性教育が検討されたこ

と、しかし結果としてこれらの変化に対応できるような政策を打ち出せなかったことが、西ドイツ社会国家システムが十分機能しなくなる一つの要因になったことを明らかにしたい。

◆平塚博子（日本大学）

冷戦初期のアメリカにおけるメディアとジェンダー表象—『ライフ』誌が描いた女性たち

第2次世界大戦はアメリカにとって武力、経済力、メディアのすべてを用いて戦う総力戦であり、深刻な労働力不足という問題を受けて、政府は従来男性領域とされてきた領域での女性の労働力の動員を迫られることとなる。メディアが戦時の新しい女性のイメージ作りに大きな影響力を持つものと考えた政府は、戦時中様々なメディアに協力を要請し、多くのメディアがそれに応じた。戦中、アメリカの女性たちは妻や母として家庭を守るだけでなく、軍需生産はもちろん軍の要員としても動員され、労働力として戦時下のアメリカ社会の中で大きな役割を果たすこととなる。第二次世界大戦は、アメリカ人女性の社会進出促すと同時に、アメリカ社会における伝統的な「女らしさ」の概念に修正を迫る契機となった。しかし、こうした女性の社会進出やジェンダー秩序の揺らぎはあくまで戦時という非常時の期間限定的なもので、戦争終結後アメリカ社会は伝統的なジェンダー規範に回帰する。この時期のメディアも、「女性の社会進出は一次的なものであり、戦争という非常時が終われば女性は家庭に帰る」という政府のプロパガンダを踏襲し、女性表象において母性や家庭性を強調するものが目立つようになる。

一方で、戦後と冷戦期におけるアメリカ社会とメディアの伝統的なジェンダー規範への回帰という現象を詳しく見ていくと、様々な矛盾や複雑さを示していることがわかる。このような点も含めてこの時代のジェンダー規範及び表象を考察することは、この時期のジェンダーの問題に加えて、戦中の女性の社会進出の意味、さらには60年代以降本格化する第2波フェミニズム運動との関連を考える上でも重要だと考える。この時期のジェンダー規範や表象に見られる矛盾や複雑さは、同時にこの時期のアメリカが国内外に抱える矛盾や緊張関係を前景化する。戦争終結後、冷戦の時代に突入すると同時にアメリカは西側諸国のリーダーとして、アジアやヨーロッパやアフリカそして南米諸国における民主化と反共産主義政権の樹立に積極的に介入していくこととなる。国内においても、戦争協力によって社会での存在感を増したアフリカ系の人々による公民権運動がついに本格化してくる。

こうした国内外における民主化や平等化の動きは、アメリカ国内でのジェンダー規範における伝統回帰にもさまざまな影響を及ぼし、必然的にこの時期のメディアによるジェンダー表象も矛盾や緊張を帯びたものとなってゆく。

本報告では、戦中戦後を通じてアメリカで最も影響力のあったメディアのひとつであった写真週刊誌『ライフ』を取り上げ、戦後から冷戦初期にかけてのジェンダー表象を主に女性の表象に着目しながら検証する。この時期の『ライフ』をみていくと、その女性表象が伝統的な「女らしさ」を強調しながら、当時のアメリカ社会が抱える様々な矛盾を露呈していることがわかる。この時期の『ライフ』の女性表象を見ていくことで、冷戦初期のアメリカでみられたジェンダー規範における伝統回帰の意味、さらには戦中の女性の社会進出の意味、そして60年代以降のフェミニズム運動への影響なども併せて考察してみたい。

◆伊藤淑子（大正大学）

響きあうペルソナ:『アリス・イン・ベッド』におけるマーガレット・フラー

スーザン・ソントグの戯曲『アリス・イン・ベッド』(1993)は女性に対する抑圧に抗する複数の声を響きあわせる。それらの声は時代を超え、実在と創作の境界も超えて、女性であるということによって発生する困難な事態を告発するソントグ自身のペルソナとなる。

ヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』(1929)で仮定されたシェイクスピアの妹は、ヘンリー・ジェイムズの実際の妹アリスに重なり、アリスは『不思議の国のアリス』へとつながり、アリスが対面するのは、アメリカのフェミニズムのパイオニアといえるマーガレット・フラーである。さらにバレエ『ジゼル』のウィリーの女王ミルタなどが登場し、物語や歴史、家族をバックグラウンドとする重たい課題を背負う女性たちに、ソントグはそれぞれの声を与える。

連想によってかき集められたかのような登場人物の取り合わせは、『アリス・イン・ベッド』を着想の妙が優る作品であるようにも思わせもするが、女性たちの怒りを孕む声、あるいは沈黙は、ソントグのラディカルなフェミニズムを反映したものであるといえるだろう。文学的想像力と現実に存在する抑圧への対抗はどのように重なり、どのような抗議の言説となっているのだろうか。

とくに注目したいのは、ソントグがフラーをどのように表象しているかという点である。フラーは『19世紀の女性』(1945)をはじめとする著作において、トランセンデンタリズム的な理想主義を物語の手法を用いて語り、男女の性差の自明性を否定し、性差を超えた全

人格的な存在になることを提唱する。フラーには生存中から、時代をはみ出す知性を有する女性という固定したネガティブなイメージもあるが、『19世紀の女性』から約150年を隔ててソントグが自身の戯曲のなかにフラーを登場させるとき、ソントグはフラーをどのような人物として描き、フラーに何を語らせるのだろうか。フラー自身のことばとソントグがフラーに語らせることばを検証し、フラーとソントグのあいだのずれと共鳴を探る。文学的想像力と現実、フラーとソントグ、この二つの対比軸を交わらせて、ジェンダーをめぐる議論がどのように継承されるのかを、『アリス・イン・ベッド』を一つの事例として考えてみたい。

◆杉村使乃（敬和学園大学）

イギリスに見る雑誌が作る第二次世界大戦下の女性像

第二次世界大戦は各国が国民総動員の下に戦った総力戦であった。より多くの男性を前線に送るため、イギリスでは第一次世界大戦時にならい、農業労働、軍需工場を含む工場労働をはじめ、男性が不在となった多くの職場に女性が登用された。しかしながら、男性の職場や軍隊の内部にも進出した女性の戦時活動は既成のジェンダー秩序を揺るがすものでもあった。こうした女性たちの姿や活動はどのように社会に伝えられたのだろうか。第一次世界大戦後、選挙権を獲得し、「国民」としての女性がどうあるべきかについては、戦間期より、女性雑誌で盛んに議論されていた。拡大する権利と活動領域を手にする一方、それによって揺らぐ「女らしさ」に社会全体が戸惑いを感じていたことがうかがわれる。雑誌における女性表象は、「国民」としての女性をどのように位置づけていたのか、また「民主主義」を旗印にしていたイギリスの大義に、女性表象はどのように関連付けられていたのだろうか。

戦時下のメディアでは総力戦にふさわしい「国民」の再生産のために言説と画像が意識的に操作され、戦況によって女性やエスニックグループを国家にとって都合良く包摂・排除するための手段として使われていたと考えられる。雑誌はジャーナリスティックな記録であるだけでなく、国家や「国民」、またジェンダー秩序を再構築していく重要な手段でもあった。本発表では、イギリスの大衆誌、女性誌を取り上げ、それらにおける女性表象を分析し、戦時下のジェンダー秩序にどのように影響を与えたのか考察する。

この研究において取り上げる雑誌は、写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』、女性誌『ウーマン』、『ガールズ・オウン・ペーパー』である。表紙、グラビア写真、広告における女性

表象を主な対象とし、当時のジェンダーや社会階層、戦況による影響、イギリスにおける国民の動員に関する方針、戦略を留意しつつ、分析を進める。ターゲットにする読者層——女性、男性、どちらが主な読者なのか、どんな社会階層でどんな志向やライフスタイルなのか——によって分類される雑誌では、同時代であっても女性表象に差異が見られる。戦時下の女性たちを同じ活動に従事するものであっても、違う形で表象することもある。戦争のどの時期に、どのような女性表象が発信されていたのか、映画などの他のメディアの影響、急激に流入してきたアメリカ文化の影響をどのように受けていたのかについても触れる

部会 B

◆Christine LEVY (モンテニュー・ボルドー大学)

日本とフランスにおけるジェンダーバッシング

フランスでは同性愛結婚に反対する勢力がかなり大きな規模で動員し、それ以来活躍を続けている。ジェンダーという概念自体に強く反発し、それが男女差の否定、同性愛の教育が強制導入されていると等を理由に、フランスのある地方では子どもを学校に行かせないという運動までが生まれた。

この攻撃に対して政府の答えは曖昧的であったり、ジェンダー理論 (théorie du genre) という物は存在しないとか等と声明し、親を安心させる、(つまり有権者を安心させる) というのが第一の目的として現れた。その課程でジェンダー理論というのは男女平等とは次元の違うもの、ジェンダー理論は存在しない等と、現在、論争の種になりそうな発言を避けようとする一方、平等という概念を強く強調している。

日本もフランスもジェンダーという概念の中立化、内容の空洞化をその言葉を使いながら果たそうとしている傾向が存在するという点においては共通点がある。

しかし、日本とフランスで大きく違うのは、平等という概念に対する態度で、日本の政局は平等と言う言葉を忌避しているのに対して、フランスでは平等を掲げてジェンダーという言葉避けようとしてきているということである。

大学のレベルでのジェンダーという概念の認識過程ではその傾向が著しく、ジェンダー研究の認識自体が遅れて、日本と対照的でもある。

男女平等の問題とジェンダーの問題を切り離そうとしているのは2013年に採用された同性愛者間結婚に対する反対から強く生まれた。この考え方では性アイデンティティをジェ

ンダー理論が覆そうとしているという懸念を促し、強制的に子どもや若者を同性愛者に導くという訴えが読まれる。しかし具体的にはその内容はホモフォビアと反フェミニスト姿勢が同一している思想であることが分かる。

社会的にはフランスの方がジェンダーギャップ指数ランキングでも見られるように、57位から45位に昇り、この数年、特に2000年にパリテエが導入されて以来あがってきたのであるが、女性らしさのイメージが強く女子に圧迫を加えると言える。

両国を比較して、フェミニズムの歴史を参考し、反フェミニストの現れ方がどう違うのかを考慮して現在の男女平等のすすめ大きく障害として存在する『女らしさ』『男らしさ』の新しい肯定と新しい批判が両国で労働市場、学校や家庭内でどう現れているのかに付いて考える。

この問題に付いて両国のフェミニズムがどう向き合って、どう一新しているかを考える。

◆松下里織（神奈川大学博士課程）

英領カナダにおける日本人娼婦——19世紀末から1920年代にかけて

本報告は1970年代以降、森崎和江らの研究により一般に知られるようになった「からゆきさん」すなわち海外日本人娼婦の歴史を、19世紀末から20世紀初頭のカナダを対象として考察するものである。これまでの海外日本人娼婦研究、「からゆきさん」研究は、欧米植民地下の東南アジア地域を中心に語られてきたが、それ以外の地域の研究はあまり進んでいない。このような先行研究の状況の中、海外日本人娼婦の研究としてカナダを対象を移すことにより、従来の「からゆきさん」研究とは異なった海外日本人娼婦の実態を明らかにしようとするものである。また、カナダの日本人娼婦の実態だけでなく、日本を含む世界的な娼婦運動の中にカナダ娼婦運動を位置づけようと試みたものである。

19世紀末から20世紀初頭にかけての日本人カナダ移民、とくに日本人娼婦の実態を知る史料は限られているが、当時カナダで発刊された邦字新聞の言説と領事館報告を中心に、カナダに存在した日本人娼婦がどのような人であったのか、日本人移民社会ではどのような位置づけがなされたのかを明らかにした。さらに、国際的な娼婦運動の高まりの中で、日本人移民への排斥に対抗するためにカナダ日本人移民社会で巻き起こった娼婦運動がどのように行われたのかについて明らかにした。その結果、19世紀末イギリスから始まった世界的な娼婦運動が主にキリスト教主導で実施されていたのに対し、カナダの日本人移民社会の娼婦運動の中心には日系ジャーナリズムが位置していたことが明らか

になった。このようなキリスト教主導ではない廃娼運動がどのように始まり、どのような結果をもたらしたのかを分析することは、未だ売買春を問題視しないキリスト教以外の社会での問題解決に向けた方法がみつかるのではないだろうか。

◆梅野りんこ（無所属）

ジェンダーを越境したカストラート

カストラート（男性去勢歌手）が、公的にその存在が認められたのは、16世紀半ばである。キリスト教会では、聖書にある聖パウロの言葉により、女性が教会で歌うことが禁じられていたが、ルネサンス以後多声音楽が複雑になると、高音部を担うために、カストラートが出現する。16世紀末になってオペラが誕生すると、当初は舞台でも女性の参加が禁じられたことから、カストラートは舞台にも呼び出されるようになる。彼らは女性役ばかりか男性役をも担い、たちまち人気を博した。今日のマイケル・ジャクソンやマドンナのようなスターとして人々の熱狂をあおり、各地で女性たちが失神する騒ぎが起こったとも言われる。19世紀に衰退するまでの約250年の間、カストラートはフランスを除くヨーロッパの宮廷や舞台で国際的に大活躍した。彼らの存在なしに、今日のオペラの発展は考えられない。

カストラートが活躍したのは、いわゆるバロック時代であるが、「歪んだ真珠」と言われるバロックには奇異なもの、人工的なものが好まれた。オペラはバロック的な好みとしての祝祭と蕩尽を求める新しい芸術様式であった。同時に17世紀、18世紀には、両性具有に対する非常な関心があった。倒錯や性転換への潜在的な願望があり、身分の隠蔽や変装趣味への嗜好が見られ、性の曖昧さにも寛容なのが、バロック時代であった。華やかな舞台で羽飾りを付けた衣裳に身を包み、機械仕掛けを駆使して空から戦車に乗ってカストラートが降りてくる。超絶技巧で歌われるその声は、男でもなく女でもなく、天上的、天使的、官能的なものとして、バロック時代の人々を酔わせ、両性具有というバロックの理想を体現していた。

カストラートの衰退が始まったのは、18世紀半ばごろからである。人権思想や革命思想が広まると、徐々に彼らは人気を失い、19世紀になると嫌悪と嘲笑で迎えられるようになる。19世紀はヨーロッパにおける女性の社会的地位が極限まで落ち込み、異性愛規範がこれまで以上に厳しくなった時代である。カストラートのジェンダー越境は奇形、人権侵害、自然の冒瀆などに見られて、カストラートが存在したこと自体が恥ずべきものとして、そ

の歴史が隠されるようになる。男女の区別はより明確化され、曖昧な性を許さないジェンダー秩序が確立されていく。

女性の地位の没落と、カストラートの衰退が同時進行する 19 世紀は、近代がいよいよその特徴を表してくる時代である。先鋭化するジェンダー規範と近代の成熟に焦点をあて、「近代とは何か」について再考する。

◆林葉子（大阪大学）

廃娼運動の日英米情報ネットワークの形成過程

本発表は、明治期の日本に、イギリス帝国の廃娼運動についての情報が流入する際に、アメリカの Woman's Christian Temperance Union (WCTU) がどのように関与したかを明らかにしようとするものである。日本の廃娼運動と、西欧諸国を中心とする国際的廃娼運動との思想的な相違は、どのように生じたのかという問題意識から、初期の廃娼運動の日英米間の情報ネットワークの形成の在り方に、その遠因を探るものである。

19 世紀末以降、西欧諸国を中心とする国際的廃娼運動においては、イギリスの廃娼運動家が中心的役割を担った。しかし、そのイギリスと日本の廃娼運動との人的交流や思想的影響関係については、先行研究がなく、今後、日本の廃娼運動の歴史を世界史に位置づけるためには、廃娼運動の日英関係史を把握することが必要不可欠である。本発表においては、特に、アメリカの WCTU を経由して日本に伝えられたイギリスの廃娼運動についての情報が、日本における廃娼運動に与えた影響に着目する。イギリスの廃娼運動についての情報は、救世軍等を経由して伝えられたものもあるが、最も初期の段階では、WCTU からの情報の影響力が大きかったためである。

日本の廃娼運動においては、海外における廃娼の動向についての情報が、その運動の方向性を定めるにあたって、重要な意味を持っていたと推定できる。日本においては、同じ廃娼運動団体のメンバーの間でも「廃娼」の意味は統一されておらず、「廃娼」という言葉の意味するものが、長らく定まらなかった。しかし、廃娼運動家の中には、外国語を使える者が少なくなく、海外からの情報をもとに日本における「廃娼」の在り方が探られ、特に、イギリス帝国に関わる情報は重視されていた。イギリスは、国際的廃娼運動の中心であっただけでなく、その「帝国」としての在り方が、人びとの関心をひいていた。

日本の廃娼運動の方向性を定める初期の段階で、イギリスの廃娼運動についての情報の多くが、イギリスから日本へ直接に伝わるだけでなく、アメリカの WCTU 経由で伝えられ

たことは、思想史的な観点から見ても重要である。なぜなら、イギリスの廃娼運動を率いた Josephine Butler らと WCTU の主要なメンバーとのあいだには、廃娼運動の在り方をめぐって、根本的な意見の対立があったためである。日本に流入するイギリスの廃娼についての情報の多くが、一時期、アメリカの WCTU のフィルターを通して伝わっていたという経緯により、日本における廃娼思想は、西欧諸国を中心とする国際的廃娼運動の主流とは異なる WCTU 寄りの思想となったと考えられるのである。本発表では、日英米間の情報流通の実態について探ると同時に、それがどのように日本の廃娼思想の在り方に影響を与えたのかを分析する。

部会 C

◆小泉友則（総合研究大学院大学博士課程）

歌舞伎の性表現から子どもを遠ざけること：幕末—明治初期の議論を中心に

発表者は、日本における子ども（幼児期～小学校中学年程度）のセクシュアリティに関する歴史研究を進めている者である。今回の研究発表では、幕末～明治初期に展開された、歌舞伎の性表現から子どもを遠ざけるべきである、あるいは、淫らな歌舞伎の演劇内容を子どものために改めよとした一連の議論について焦点を当てていきたい。

当時の歌舞伎においては、男女のリアリスティックな情交・肉欲を表現した劇が多々演じられ、それは主に中流以下の階級に位置する庶民において広く受け入れられていた。ただ、儒教的な価値観を範とする幕府権力や、近代西洋的な価値観へと接近しようとする明治政府からすれば、当時の歌舞伎の社会的な広がりには悩みの種であった。それゆえに、歌舞伎やその他の芸能は、統治権力からの規制をしばしば受けることとなる。近世期には幕府権力から風俗矯正・奢侈の禁止としての取り締まりがしばしばなされていたし、明治期には近代西洋的な価値観との接近の中で、再度風俗矯正を理由に歌舞伎はさらに厳しく咎められることになった。

世の権力者たちは、歌舞伎を規制するために様々な論理を用い、歌舞伎の演劇内容を改めるように指示をしてきた。その論理のなかには、歌舞伎の中の性表現が子どもに悪影響を与えるため抑止されるべきであるとしたものも含まれていた。そうした論理の存在は、近世期であれば儒学者が刊行した書籍や幕府から出された通達文などから確認ができ、明治期もまた同様に、新聞での歌舞伎への批評や明治政府の通達などから確認ができる。

また、興味深いことに、明治初期からは、外国人の非難の対象になりうるために、子ど

もに歌舞伎の性表現を見せてはならないとした論理も登場することとなる。実際に、開国以降、日本には外国人が多く訪れるようになり、日本の風俗の「実態」が西洋の各国に見聞録や報告書として出回るようになる。そうした見聞録などをみると、確かに日本の「淫ら」な歌舞伎の場に子どもが居ることが非難されている様を頻繁に確認することができる（代表例として、R・オールコック 1863=1962『大君の都（中）』岩波書店,pp.386-395）。

歌舞伎の性表現から子どもを遠ざけるべきだとする議論においても、それにはいくつかのバリエーションがあり、また時代的な論理の変容も起こる。本発表ではそうした議論を概観といった形で追うことにより、子どものセクシュアリティに対する近世的な議論や観念が近代西洋との接触の中でどのような変化を見せるのかの一端を明らかにしたい。

◆鬼頭孝佳（名古屋大学博士課程）

中村正直女性教育論の死角—漢文脈からの影響

幕末～明治初頭儒者・洋学者・官僚・政治家中村正直の女性教育論や「盲人教育」論に関する先行研究は少なくない。

たとえば、小川澄江氏はキリスト教と洋学にその源流を求めている。確かに、中村正直はキリスト教の熱心な信者であり、日本の女性教育におけるキリスト教宣教師の活動を考慮すれば、その検討の方向性は妥当である。しかし、中村正直は儒学思想または語彙を媒介にしてヨーロッパの思想を解釈している。ということは、西欧の思想と漢文脈の間には解釈のずれや思想上の緊張状態を想定し得る。この点は平川祐弘氏の比較文学研究に詳しいが、彼のフェミニズムに対する先入見の結果、女性教育論における漢文脈の問題について本格的な検討をするに至っていない。

本研究発表では中村正直の女性教育論を漢文脈から再検討する作業である。特に、彼の「胎教」に対する考え方が、儒教における「胎教」思想の変遷、漢方医学における「胎教」の解釈の変遷の影響を受けつつ、ヨーロッパにおける「胎教」思想を受容した可能性があることを、中国・朝鮮・日本の胎教言説・医書の分析を通して明らかにする。

また、中村正直が詩経の関雎を引用して述べる女性の理想像は、江戸期の女訓書にも既に記載されていることであり、同じ詩経という漢文脈の中心に位置するテキストの解釈をめぐって、江戸期の女訓書と中村正直の女性の理想像の間にどのような共通項と差異があるのかを確認し、その背景としてどのような社会状況の変化が考えられるのかについて、法制史・経済史・社会史を手掛かりに考察する。この考察を通じて、「良妻賢母思想」がそ

もそも「良妻思想」と「賢母思想」から構成される、関連は深い、別な思想であり、その両者が接近する過程として中村正直の女性教育論を位置付けることができることを明らかにすることができると思える。

さらに、漢籍の受容という観点から中村正直と同時代に書かれた福澤諭吉などの女性教育論との比較を試みる。その結果、この幕末から明治初期という時代の女性教育論を分析するに当たっては、本来の儒教言説がどのような女性教育論を目指していたのかを把握すること、そのうえでその儒教言説が中国から日本に至る相互交流の中で、どのような解釈の変更が行われてきたのかを明らかにすること、さらにその儒教言説の解釈が西欧思想の媒介としてどのように作用したかを考察するという三段階を経て、初めてその女性教育論を歴史的過程に位置付けることが可能になるということが、事例を通して明らかになるだろう。多くの幕末～明治初期を対象とする、特に近代史・社会学を中心とする「良妻賢母」論にはこの視点が抜け落ちている故に、「良妻賢母」論の背景を捉え損なっていることを今後の研究の課題として提示したい。

◆宇野知佐子（東京女子大学博士課程）

嘉納治五郎と東大生の「男らしさ」

現在世界中で行われている柔道の基となっている「講道館柔道」の創始者嘉納治五郎は、なぜ柔道を理想の日本男子の人格形成の手段と信じたのか。これを明らかにするために、嘉納が柔術と出会った時期に着目しながら、当時の嘉納が思い描いた「男らしさ」を考察することが、本研究の目的である。

嘉納治五郎（1860～1938年）は、日本古来の柔術の技を理論的に体系化、ルールを確立、教育的価値を取り入れることによって柔術を“近代化”し、「柔道」と名付けた。1882（明治15）年、講道館を開設し、「講道館柔道」の指導を開始した。嘉納が柔術を習い始めたきっかけは、学生時代の経験にあった。嘉納の生家は摂津国御影村で醸造・廻船を営む富裕な商家で、父次郎作は幕末に幕府の廻船方御用達をつとめ、維新後は政府に仕えていた。11才のときに嘉納は父のいる東京に移り、当時一流の塾・学校で学び、明治8年東京開成学校に入学したが、腕力を誇る士族の学生に力で手向かいできなかった苦い経験から、柔術の稽古を熱望するようになった。明治10年東京大学に入学後、念願かなって柔術の稽古を開始して以来熱心に稽古に励みながら複数の流派を研究し、大学卒業後の明治15年、講道館を開設した。嘉納が柔術に目覚め、稽古に打ち込んだ東京開成学校・東京大学時代を、

嘉納の講道館柔道の「男らしさ」の基盤が確立した時期ととらえ、当時の嘉納の経験がどのように彼の「男らしさ」に結びついたのでかを考察する。

東京開成学校とその後進である初期の東京大学は、高度の専門的能力を持った人材養成の場だった。当時これらの学校を特徴づけていたのは、旧藩から中央に送り込まれた「貢進生」と、専門学を教授する外国人教師の存在だった。「貢進生」は明治4年、政府の要請により各藩から選抜され、開成の前身である大学南校に入学した士族の子弟たちで、彼らの多くは両刀を携えて上京し、藩政の習慣を忘れず、旧来の武士の気風を備えていた。また当時の教師のほとんどは外国人で、早急な産業化・近代化の推進をはかるための必要不可欠な存在であると同時に、日本の大学が玉石混淆の外国人に頼らざるを得ない、未だ自立できていない「洋語大学校」であることの象徴でもあった。「貢進生」を含め、学生の大半である「士族」の学生とともに外国人から最先端の西洋の学問を学びながら、嘉納は数少ない「平民」の学生として、他の学生とは違う視点や意識を持っていた。幼少期から東京で育ち、新旧の価値の入り混じる学校で、身分も育ちが異なる学友に囲まれて学生時代を過ごしながらか、時代遅れで野蛮だとして廃れていた柔術に魅力を見いだした当時の嘉納治五郎が思い描いた「男らしさ」を明らかにしながら、近代化を急ぐ明治政府の初期の政策の現場にいた「観察者」としての嘉納の視点を通じて、明治初期の試行錯誤の時代を新たな視点で検討する。

◆大橋眞由美（大阪府立大学）

昭和初期『子供之友』のメディア・イベント

昭和初期1930（昭和5）年12月に、文部省訓令「家庭教育振興ニ関スル件」が発せられた。家庭教育は明治期から唱道されていたが、これを機に家庭教育振興策が国策として展開された。各地で「母の講座」が開催され、幼年用メディアである絵本・絵雑誌の改善が提唱された。

この時期、新中間層の家庭に於いては、概ね良妻賢母教育を内面化した女性が主婦となり、母親にもなっていた。そのような母親に向けて、倉橋惣三や羽仁もと子などの家庭教育論者は、教育雑誌、婦人雑誌、子ども雑誌などを通して、家庭教育の重要性や母親の介助役割を説き、既存の絵本を批判して、教育性や芸術性を謳った絵雑誌の監修や編集を行った。

本発表では、新中間層の子どもを読者対象とした『子供之友』（1914-43）から、17～25

巻（1930-38）を取り上げる。この誌は、婦人之友社から刊行され、羽仁もと子責任編集の絵雑誌であり、1930年代には誌上を通して読者にメディア・イベントへの参加を呼びかけた。

婦人之友社は、羽仁もと子と夫・羽仁吉一によって設立された出版社であり、『婦人之友』（1908-）を主力商品としている。現在にも『婦人之友』は刊行されており、読者組織の家政研究団体「友の会」も活動を続けている。先行研究でこの誌は、戦前期の新中間層の家庭に影響を与えた婦人雑誌と評価されており、文部省主導の「生活改善運動」に関連した記事の掲載数の多さと、「友の会」による「生活改善運動」への積極的関与を指摘されている。

『子供之友』は、良い子の甲子と上太郎、普通の子の乙子と中太郎、悪い子の丙子と下太郎の行状を表象とした絵ばなし《甲子上太郎》シリーズの連載などから、現在には教育的絵雑誌と評価されている。この誌は、家庭教育振興策の展開と軌を一にして、看板絵ばなし《甲子上太郎》をキーワードとした読者参加型のイベントを展開させた。

このイベントは、読者が家族（概ね母親）と共に家庭内に会を結成して、《甲子上太郎》の表象を規準として一か月の行状を点数化し、読者欄を通して報告して、その継続回数によって褒賞（メダル）を貰えるというものであった。参加した子どもは「甲子さん上太郎さんたち」と名づけられ、母子を一単位とした会は「甲子上太郎会」と呼ばれて、地域毎に連盟が組織された。このイベントでは、関連企画が次々と展開し、前例に触発された参加者が続々と参加した。参加者は、日本国内に留まらず、親とともに滞在する中国大陸やハワイ諸島などからも参加し、誇らしげに胸に褒賞を飾った肖像写真を誌上に公表した。

本発表では、『子供之友』のメディア・イベントは家庭教育を介した母子一体の国民化に関与したとする仮説の下に、母親の関与と女子の参加者に焦点を絞り、その意義を検討する。

部会 D

◆ 國原美佐子（東京女子大学）

日露戦争時における日本赤十字社看護婦と外国人篤志看護婦との協働

本発表では、日露戦争時に日本赤十字（以下日赤）が受け入れた米、英、仏からの篤志看護婦およびドイツ赤十字から派遣された看護婦に対し、日赤が何を期待したのかについて報告する。第一次世界大戦で日赤看護婦は同盟国への協力という形でヨーロッパ各国の

病院へ派遣される。そのような国際協力は日露戦争時の篤志看護婦の受容の体験があつてこそである。

来日中の外国人看護婦については、日赤が隔週で刊行していた機関誌『日本赤十字』にて報道されただけでなく、当時の女性雑誌などにも頻繁にとりあげられ、国内でも大きな注目を集めていた。

日赤は有閑階級の女性を対象にした篤志看護婦の育成と、職業としての看護婦である日赤看護婦の育成を進めてきた。日本は近代国家建設においては後発でありながら、看護の分野においては世界に後れをとることがほとんどなかったことを日赤は自覚していた。イギリス王妃も日赤に関心を持ち、イギリス人ジャーナリストを来日させている。

しかし、日露戦争での日赤育成看護婦たちと外国人篤志看護婦の協働があつてこそ、世界レベルでもそのことが認識されるようになった。アメリカ人看護婦の滞日中の体験は米赤十字の再建に影響を与えたことはすでに知られているところである。来日した篤志看護婦は職業看護婦とセミプロ看護婦とがいる。『日本赤十字』ほかに掲載されたこれらの篤志看護婦たちの言動を出身の背景の差異にも配慮しながら検討する。特に、彼女たちのあるべき姿の一例と日赤が見込んだのが滞在期間の長かったイギリス人篤志看護婦「リチャードソン夫人」である。彼女は軍人である夫を亡くしていた。『日本赤十字』に見える彼女の言動は非常に謙虚であり、日赤はその点を強調する記事を何度となく掲載している。

また、日本にも 2 種類の日赤看護婦が存在する状況にあつたが、来日看護婦たちがこれらの日赤看護婦それぞれに与えた影響は何だったのかについても検討をしたい。日赤側は日本人看護婦たちに何を学ぶことを期待したのか。幅広い社会階層の女性にとって看護活動の機会がもっともわかりやすい戦争協力である。日清戦争においては、日赤育成看護婦の一期生教育が終了して間もなくだったため量的不足は否めず、また、初めての対外戦争であるという点も踏まえ、有閑階級の女性たちの日赤への協力が目立った。ところが、日露戦争においては、篤志看護婦が国内の重要病院へ派遣されることは稀になる。そのかわりに、来日看護婦との交流の中心に日本人篤志看護婦たちが存在する構図が成立する。日赤は篤志看護婦に対し、日清戦争時とは違う役割を与えたと考えられる。

このような日本側の体制の変容も考慮にいれながら、日露戦争の外国人篤志看護婦の受け入れについて再検討をしたいと思う。

◆井上直子（一橋大学博士課程）

愛国婦人会の組織改編と地域・女性一分会活動を手がかりに

本報告では、1932年に行われた愛国婦人会の組織改編と婦人報国運動を検討の俎上に挙げ、大正期に拡大した愛国婦人会の活動がどのように変容したか・しなかったかを明らかにする。愛国婦人会に所属した女性たちの活動から、戦前・戦中日本で女性が社会に関わることの意味と実態に迫りたい。愛国婦人会は1901年、奥村五百子によって発足した銃後支援団体である。1917年の会則改定により社会事業へ活動を広げ、「女中」養成や託児所運営など展開したことが先行研究により明らかとなっている。戦間期における愛国婦人会の活動拡大が、日中戦争や大日本国防婦人会の発足を受けどう変遷するかを本報告で検討する。具体的には、1932年、①愛国婦人会の支部組織改革、②婦人報国運動の提唱という二つの転換を愛国婦人会は迎えた。①により、各地に必ず町村単位の「分会」を組織させ、それらを活動の基礎単位とさせることとなった。さらに、銃後支援活動のみならず、託児所運営や災害救援、経済更正運動や選挙粛正運動への協力など社会事業も婦人報国運動へ位置づけることで、会としての活動範囲を拡大させた。第1章では、この時期、事務総長に就任し愛国婦人会の改革を進めた事務総長・小原新三らの言説を通して、組織改編と婦人報国運動の目指したものを明らかにする。会内の改革を受け、愛国婦人会機関誌『愛国婦人』に登場したのが模範分会である。誌面構成も「本支部分会報告」コーナーや写真による分会活動紹介のページが登場し、『愛国婦人』およびこの時期に刊行され始めた支部版は全国の分会活動を共有する場ともなった。第2章では誌面に登場する分会を検討することで、婦人報国運動がどのように模範分会に受け止められ、どういった活動が選択・実行されたのかを分析する。愛国婦人会では会組織改編の目的に会員の獲得を掲げており、この時期発足した大日本国防婦人会といわば会員の「取り合い」が起きていた。こうした状況下で模範分会に示されるのは、会員の獲得、銃後支援、地域の社会事業に「努力」する会員たちだった。最後に、一地域の分会を取り上げることで、地域の婦人会に愛国婦人会の改編がもたらしたもの、また変わらなかったものを検討する。本報告で取り上げる埼玉県の潮止村分会は、明治期より潮止村の地域婦人会として存在していたが、会員数は少なく、活動もそこまで活発とは言えなかった。1932年の愛国婦人会改編を受け、潮止村分会の活動が報告されるようになったが、活動内容は出征兵士の見送り・出迎え、村葬の手伝い、不要品・くず鉄蒐集、愛国貯金と銃後支援活動が中心で、愛国婦人会本部の婦人報国運動に沿うというよりも、銃後活動を行うというのが現状だった。先行研究によると、潮止村の女性たちは愛国婦人会のみならず、国防婦人会も兼任していた。ここから伺えるのは、潮止村での婦人会の担い手の少なさであり、それは同村で刊行されていた村行政報

告書『潮止月報』に婦人会活動がなかなか掲載されていないことに共通する。こうした分会の現状を検討することで、愛国婦人会による女性たちの活動範囲「拡大」の意味を考えたい。以上の愛国婦人会の女性たちを通して伺えるのは戦前・戦中女性の求められた像と実像のギャップである。そのギャップを検討することこそ、戦前・戦中日本社会におけるジェンダー構造に迫る一つと考えるがためである。

◆長志珠絵（神戸大学）

戦前戦後における空襲言説の変容とジェンダー

空爆という軍事技術は第一次世界大戦で登場し、第二次世界大戦下で本格化した。民間人を大量爆死させた空襲という経験は、戦後日本では、原爆被害と並んで戦争被害者としての「国民の物語」を形成してきた。もちろんこうした一国史的な語りのあり方の限界は今日明らかだ。日本軍による重慶爆撃等の一方、米軍による空爆被害が帝国の版図におよぶこと、戦時下日本の都市部の多民族性など帝国や植民地責任へのイメージの欠落など、戦後日本において空襲が語られる際の前提を歴史研究は、ときほぐすべき段階にある。その一方で、核被害への文化的表現が統制を受ける今日では、映画『火垂るの墓』に象徴されるような、セクシャリティを廃し、無垢な子どもイメージによる「日本人空襲犠牲者像」が戦争イメージを覆うことの問題性は、改めてその歴史性を通じて検討されるべきだろう。

本報告では、1930年代以降の日本の防空言説から占領期、1970年代での戦災空襲記録市民運動での空爆空襲に関わる言説を取り上げ、ジェンダー配置の変換として読み解くことを課題とする。

第二次世界大戦下の言説にあって空爆は、人々を住居ごと焼き尽くすことで、敵にダメージを与えようとする心理作戦とされたが、今日では植民地主義との密接な関係が指摘されている。また空襲研究は歴史のアカデミズム学会ではあまり関心が持たれてこなかったが、女性や子ども、老人といった非戦闘員が住居ごと生命を奪われた空襲被害への関心は社会史的な視点や批判的な帝国史の広がりが必要とするとともに、空爆を受ける側の政府・軍部にとって、その被害実態そのものが情報統制の対象であり、記録の回復が重要な課題となることも重視したい。本土都市部に限定しても440箇所以上、マジョリティの経験であった空襲被害はしかし、同時代及び戦争後においても政府は調査機関や保証制度をもうけず、社会の未来の安全に向けて調査や原因究明を行ってこなかったのである。国家の情報操作や機密保持という枠組みからいかに社会の側が情報を取り戻し、未来に向けた

記録と社会的記憶を形成できるのか。女性や子どもの死者が多いとされる空襲被害を明らかにする作業とその認識地平は、戦争の事後の社会の人権意識、ジェンダー認識と密接に関わる問題領域といえる。

他方、戦時下から占領期、戦後の空襲イメージは、女性表象と密接に関係している。戦時下において、銃後の本土に非戦闘員として残された女たちは、空爆が始まると即戦力であることを期待され、女性ジェンダー表象からは逸脱した。占領軍による空爆意識調査では女性たちは、女性ジェンダー化された空襲被害者として扱われる一方、空爆作戦による厭戦効果を確かめるための一コマとしてそれらの情報は単純化され、「日本人」論へと回収されていく。1970年に前後する空襲記録運動のなかでその中心的な活動は女性たちがいない、地域女性史の営みとして捉える作業が必要であるものの、同時代のナラティブでは、庶民、市民として性なき「日本人」全体の被害として語られた。空襲をめぐるこうしたジェンダー表象の変化や研究史上の問題点を明らかにし、戦争の記憶とジェンダーの問題領域を考えたい。

◆徐潤雅（大阪大学博士課程）

富山妙子の作品に見る「韓国」——1970～80年代を中心に——

本報告は「富山妙子はなぜ韓国を描いたのか」という素朴な疑問から出発する。それは「韓国の問題に真剣に取り組み、芸術作品として表現した画家がいる」こと自体が、韓国ではさほど認識されていないからである。

本報告は戦後、日本が韓国の問題に関心を大きく寄せ始めた1970～80年代に、画家として意欲的に美術作品を制作し、支援運動に関わってきた富山妙子に着目する。そして彼女自身が創立メンバーである「アジアの女たちの会」の機関誌『アジアと女性解放』と、当時制作された版画イメージ例えば、《光州のピエタ》(石版画、33×65cm、1980年)や《光州のお母さん》(石版画、57×41cm、1980年)を主な分析の材料とする。

富山妙子は、1921年神戸に生まれ、1932年頃、父の仕事で旧満州へ移住した。1938年に美術教育を受けようと東京へ移ったが、戦局の中で女性が画家になることは厳しかった。戦後は中国革命に共感し、1950年代に「日本の延安」を求め、炭鉱を描いた。三池闘争の敗北後、挫折感を味わい、1960年代はラテンアメリカなどを旅し、第三世界の芸術に出会った。1968年からは「市民に権利の回復を！市民連合」など、市民運動に深く携わった。1970年11月、1971年9月、1972年の春に、韓国を訪問した富山妙子は、日本の植民地支

配の責任を強く感じるようになり、戦争・植民地の被害者を弔う作品を描き続けてきた。1995年には、韓国で個展を開き、光州ビエンナーレの特別展にも招待され、「良心的」日本の画家として注目された。

このような富山妙子の歩みは、社会の動きを端的に物語っているといえる。

周知の通り、1965年2月の「北爆」に対する抗議運動から始まった「ベトナム戦争反対運動」は、日本の社会において「アジア」に対する関心を触発する契機となった。そして、敗戦とともに記憶から消されていったかつての帝国日本の植民地「韓国」が、日本の一般社会において再び呼び起こされるのは、1973年8月の「金大中拉致事件」を起点としている。国のレベルではなく、市民が主体となって、「日本」や「韓国」の問題を共有し、取り組む動きが生み出されたのである。

たとえば、1974年4月、初の市民連帯組織である「日本の対韓政策をただし、韓国民主化闘争に連帯する日本連絡会議」(略称、「日韓連帯連絡会議」)の発足され、性侵略、反公害、民主化支援運動などを巡って、キリスト教団体や市民による連帯が作られた。このネットワークは、1980年5月の「光州事件」などへの素早い対応を可能としたし、このネットワークをベースに富山妙子の作品が移動されたとも言える。従って、市民運動のネットワークや集まりの場、チラシやミニコミ誌、出版物には、富山妙子の作品が伴われることが珍しくなかった。また、韓国軍部政権の監視の目を避けて「地下」で流通した富山妙子の作品スライドや著作は、民衆美術家たちの注目を得た。

そこで本報告は、当時、日本で韓国を描いた富山妙子が、何をモチーフとして表現したのかを検証する。その際、富山妙子が活動していた『アジアと女性解放』における言説や韓国イメージを収集し、作品との関係を検証にする。補助的分析として、韓国の民衆美術家、洪成潭(ホン・ソンダム)の版画「518 連作」(1983~1989)と比較し、富山妙子の作品がもつ特徴をより具体化する。

その結果、富山妙子の作品イメージに込められた考えを浮き彫りにし、日韓連帯の新たな側面を明らかにすることが、本報告の狙いである。